

◎『すべて神の御霊に導かれる者は、神の子供である。』（ロマ書第8章14節）

新『教会通信』（2018年10月）

☆（聖書に今日を聞く）☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 紘

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

ハレルヤ！

全知全能の神であられる我等の贖い主、イエス・キリスト様の聖名を心一杯に崇めまして、感謝と讚美をお献げ致します。願わくは、恩恵と喜悅と平安とが此の文を読まれる方々の上に豊かに注がれますように。

◎『われ地の端より汝を携え来たり、地の端より汝を召し、
斯くて汝に言えり、汝は我が僕われ汝を選びて棄てざりきと。
恐るるなかれ我なんじと共に在り、驚くなかれ我なんじの神なり。
われ汝を強くせん、誠に汝を助けん、誠にわが正しき右の手、
汝を支えん。』
（イザヤ書第41章9節10節）

旧約聖書にエホバと表記されております神と、新約聖書記載の父と子と聖霊なる神の御名“イエス”とは、同一の神様であります。

上記イザヤ書の聖言は、その前節イザヤ書第41章8節

◎『わが僕イスラエルよ、わが選めるヤコブわが友アブラハムの裔よ』との呼び掛けから始まっております。

つまり、イスラエル民族、ヤコブ、アブラハムの裔よ、と呼び掛けた後に上記の聖言が続いており、或いはユダヤ民族の末裔だけに対する文言かと受け取られがちですが、新約聖書ガラテヤ書第6章15、16節には、主の十字架に依って開かれた“水と霊”の御救いに与り、神の国に新たに生まれた私たちに向かって、こう導いておられます。

◎『それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、
ただ貴きは新たに造らるる事なり。
此の法に循いて歩む凡ての者の上に、
神のイスラエルの上に、平安と憐憫とあれ。』

割礼とは、成人男性のユダヤ教徒は必ず受けねばならない儀式であります。上記ガラテヤ書の聖言では、そんなものは受けようが受けまいが御救いには関係なく、ただ貴きは神に依って新たに造られる、即ち、“水と霊”に依って新たに神の国に生まれる事に真の意義がある事を強調しております。

なお旧約聖書にて述べられた聖言が、新約聖書の信仰と共通する事を明確にする為に、ロマ書第4章16節の下半句を引用させていただきます。

◎『是かの約束のアブラハムのすべての裔、
すなわち律法による裔(イスラエル人)のみならず、
彼の信仰に倣う裔(異邦人)にも堅うせられん為なり。』

天地創造の唯一なる我らの神は、全人類を平等に憐れまれる御方であり、イスラエル人であれ異邦人であれ、神の御旨に遵う凡ての者に同等の憐憫と祝福とを通して神の国へと導いて下さいます。

冒頭イザヤ書第41章9節10節の聖言を、元異邦人であった私達にも共通して語られたお言葉として有り難く戴き引用させていただきます。

※“われ地の果てより汝を携え来たり、地の端より汝を召し”とあり、解りやすく表現させていただきますならば、“私(神)は、地球の端っこに居たお前を見付け出して、私の前に引っ張り出した”となります。

誰もが、御救いに与っているとの確信を持つならば、確かに自分のような者が神に選ばれた事を振り返ります時、正しく地の果てから見付け出して戴いた、との思いがあるに違いありません。

御救いは、神の一方的な憐憫に由るお恵みであります。

異邦人である我等に取って、突然に思いも依らない神の御働きを得て、最高の幸運に導かれているのであります。

その神は※“われ汝を選みて棄てざりき”と仰有います。

◎『それ神の賜物と召とは変わる事無し』(ロマ11:2)と、一度口になさった事を勝手に変更する御方ではありませんから、選んで下さった私達を、神様の方から棄てるような事は絶対になさいません。

約束を違えて選んだ者を棄てる事は為さいませんが、その為選ばれた我等には、厳しくご教育をなされる神であられます。

それを試みと言ひ試練と言いますが、本物の神に選ばれた神の子であるならば、此の神からの試練を受ける事は当然であり、皆それぞれが神様からの試みを免れない事も、得心が参ります。

もしも試練に与る事が無かったら、逆に神様に愛されていないのではないかとその方が心配になります。

◎『愛する者よ、汝らを試みんとて来る火のごとき試煉を
異なる事として怪しまず、反ってキリストの苦難に与れば、
与るほど喜べ、汝ら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為り。』

(ペテロ前書第4章12, 13節)

神に愛されていると言う実感は、信仰生活を重ねる中に体験を通して実際に深い感銘を以て味あわされるもので、その都度その都度に神の慈しみと憐憫を思い知らされて参ります。

上記は、神の試煉を喜び喜びと言われる聖言であり、しかも火の如き試煉に与る事を喜びと言われましても素直にその気にはなれませんが、その者が信仰から脱落しない限り徐々に試煉に勝利する心構えが整えられて参りますから、是も又、神様の憐憫と恩恵の賜物であります。

それでも尚、愚かな人間として罪を犯した結果、棄てられるのではないかと心配する向きも有ろうかと思われませんが、ヨハネ第一の書第3章9節には次のように記されております。

◎『凡て神より生まるる者は罪を行わず、神の種、その衷に止るに由る。』

彼は神より生まるる故に罪を犯すこと能わず。』

どうしてそんな事が、断言出来るのでしょうか？

神の種とは、ルカ傳第8章11節◎『種は神の言なり』とあり、又、ヨハネ傳第1章1節◎『太始に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき』ともあり、真の御救いに与っている我等は神の御霊に内住して戴いている者でありますから、神は私たちが罪を犯す事はない、と断言しておられる由縁であります。

確かに、選ばれた神の子達には凡ての事柄の上に神のご配慮に依るご加護があり、喩えば、私に対して強い敵意を持つ者が居たとしても、

◎『愛する者よ、自ら復讐すな、ただ神の怒りに任せまつれ。』

録して“主いい給う、復讐するは我にあり、

我これを酬いん”とあり。』 (ロマ書第12章19節)

罪を犯す者は、それを犯す理由の下に行動するのであって、此のように何から何まで神ご自身がその者の凡てを護り助けて下さるのであれば、積極的に悪魔にでも靈魂を売らない限り、罪に身を染める必要は全く無い事になります。

再び冒頭句を引証致します。

※『おそるるなかれ、我汝と偕にあり』(イザヤ41:10)

自分の目を見て確認しない限りは、聖書の言葉を信じない、と言う者は我が国では珍しくはありません。

全宇宙の創造主である神様から“恐れるな、私とお前とは一緒だよ”と優しく声を掛けられて、“ああ、そうですか”と平然としておられる者が居るとしたら、その者は本気で聞く耳を持たないか、或いは、その深き真意を理解する信仰に至っていないのか、と言う事になります。

此のお言葉を自分に語っておられる御方が真の神様である事が正常に理解されていたら、驚きの余り気が動転して狂喜乱舞しても不思議では無い程の物凄いお言葉だ、と言う事も理解出来る筈であります。

信仰が未だ浅い者には、聖書のどのような聖言に触れても、感動に揺さぶられる事は殆どありません。

人間中心の世の中しか知らず、凡ての思考が人間(肉的)関係だけの範囲内に限定された生活をしておりますと、“神”の存在さえも人間相互間で言い古された偶像宗教としてしか捉

えられなくなっております。

そのような者に、聖書の^{みことば}聖言を語り聞かせても、^{うわ そら}ほぼ上の空の状態^{うわ そら}で聞き流しているに過ぎません。

然し、“水と霊のバプテスマ”を受けて、^{まこと}真の神と出逢い、神の^{しれん}試煉に向き合^{いの}って^い禱りの中におりますと、その^{つど}都度その^{つど}都度にお^{こた}応えて下さる^{たびごと}度毎に^{じよじよ}徐々にではありますが、此のイエス様こそ^{まこと}真の神であるとの^{いた}確信に至^{いた}って参ります。

信仰は、人間の^{がわ}側からの^{おもい}熱心な^{おもい}思念だけではどうにも成りません。

神からの^{たまもの}賜物としての^{おもい}働き掛^{おもい}けが無ければ、聖書に記された^{みことば}聖言を正しく理解する事は出来ません。

神を^{おそ}畏れ、神に^め服従する^め信仰の^め芽が生じて参りますと、神の^{みむね}御旨が^{せんめい}鮮明に^{せんめい}伝わって参ります。

◎『もし^{よびもと}知識を^{さとり}呼求め^え 聡明を得んと^え汝の^え声を^え上げ
銀の^{ごと}如くこれを^{さぐ}探り^{かく} 秘れた^{たから}る^{たから}寶の^{たづ}如くこれを^{たづ}尋ねば
汝エホバ（神）を^{おそ}畏るゝ^{おそ}事を^{さとり}暁り^{さとり} 神を知る^うことを^う得べし』
(箴言第2章3節～5節)

“求めよ、さらば与えられん”と、^{した}耳に親しいお言葉^{した}であります。我らの^{あなた}主は、^{あなた}信仰に関する^{あなた}貴方の“^{あなた}心の求め”を^{あなた}待^{あなた}っておられます。

◎『エホバ（神）を^{おそ}畏るゝは^{ちえ}智慧の^{はじめ}始なり
これらを行^{さとり}う者は^{さとり}皆あ^{さとり}きらかなる^{さとり}聰ある^{さとり}人なり
エホバの^{ほまれ}頌美は^うとこ^うしえに^う失^うすることなし』
(詩篇第111篇10節)

地球^{おろ}は疎か^{おろ}全宇宙の^{おろ}所有者であられる^{おろ}神と、地球の^{おろ}片隅に^{おろ}住まわ^{おろ}せて^{おろ}頂^{おろ}いで^{おろ}いる^{おろ}チッポケな^{おろ}自分との^{おろ}関係が、^{おろ}明らか^{おろ}にな^{おろ}って^{おろ}参^{おろ}ります。

やがて我らの^{けんとう}信じている^{けんい}神イエス様^{けんりよく}が、^{けんりよく}偉大なる^{けんりよく}権能・^{けんりよく}権威・^{けんりよく}権力と^{けんりよく}ご栄光の^{けんりよく}持ち主である^{けんりよく}事が^{けんりよく}理解^{けんりよく}されると^{けんりよく}共に、^{けんりよく}神の^{けんりよく}被造物^{けんりよく}に^{けんりよく}過^{けんりよく}ぎ^{けんりよく}ない^{けんりよく}我^{けんりよく}ら^{けんりよく}人間^{けんりよく}に^{けんりよく}対^{けんりよく}する^{けんりよく}神の^{けんりよく}“^{けんりよく}ご愛”^{けんりよく}が^{けんりよく}大きく^{けんりよく}浮^{けんりよく}き^{けんりよく}彫^{けんりよく}りに^{けんりよく}され^{けんりよく}て^{けんりよく}参^{けんりよく}ります。

冒頭句イザヤ書第41章10節にて※『^{おつしや}おそるる^{おつしや}なかれ、我^{おつしや}汝^{おつしや}と^{おつしや}偕^{おつしや}に^{おつしや}あり』と^{おつしや}仰^{おつしや}有^{おつしや}った^{おつしや}神^{おつしや}は、^{おつしや}同^{おつしや}じ^{おつしや}41^{おつしや}章^{おつしや}10^{おつしや}節^{おつしや}の中^{おつしや}で

※『^{なんじ}驚^{なんじ}くな^{なんじ}なかれ、我^{なんじ}汝^{なんじ}の^{なんじ}神^{なんじ}なり。』

“^{おつしや}驚^{おつしや}くな、^{おつしや}私^{おつしや}は^{おつしや}お^{おつしや}前^{おつしや}の^{おつしや}神^{おつしや}である”と^{おつしや}仰^{おつしや}有^{おつしや}って^{おつしや}お^{おつしや}ら^{おつしや}れ^{おつしや}ま^{おつしや}す。

先の“^{いっ}私^{いっ}は、^{いっ}お^{いっ}前^{いっ}と^{いっ}何^{いっ}時^{いっ}も^{いっ}一^{いっ}緒^{いっ}だ”^{いっ}言^{いっ}わ^{いっ}れ^{いっ}た^{いっ}お^{いっ}言^{いっ}葉^{いっ}と^{いっ}共^{いっ}に、^{いっ}此^{いっ}の^{いっ}お^{いっ}言^{いっ}葉^{いっ}も、^{いっ}“^{いっ}驚^{いっ}くな^{いっ}なか^{いっ}れ”^{いっ}と^{いっ}わ^{いっ}ざ^{いっ}わ^{いっ}ざ^{いっ}言^{いっ}わ^{いっ}れ^{いっ}な^{いっ}く^{いっ}ても、^{いっ}驚^{いっ}く^{いっ}べ^{いっ}き^{いっ}お^{いっ}言^{いっ}葉^{いっ}に^{いっ}違^{いっ}い^{いっ}は^{いっ}あ^{いっ}り^{いっ}ま^{いっ}せ^{いっ}ん。

“^{あなた}私^{あなた}が、^{あなた}貴^{あなた}方^{あなた}の^{あなた}神^{あなた}である”、と^{おんみずか}御^{おんみずか}自^{おんみずか}ら^{おんみずか}語^{おんみずか}り^{おんみずか}掛^{おんみずか}け^{おんみずか}て^{おんみずか}下^{おんみずか}さ^{おんみずか}る^{おんみずか}真^{おんみずか}の^{おんみずか}神^{おんみずか}が^{おんみずか}お^{おんみずか}ら^{おんみずか}れ^{おんみずか}る^{おんみずか}事^{おんみずか}自^{おんみずか}体^{おんみずか}、^{おんみずか}実^{おんみずか}に^{おんみずか}驚^{おんみずか}嘆^{おんみずか}す^{おんみずか}べ^{おんみずか}き^{おんみずか}現^{おんみずか}実^{おんみずか}である^{おんみずか}とは^{おんみずか}思^{おんみずか}わ^{おんみずか}れ^{おんみずか}ま^{おんみずか}せ^{おんみずか}ん^{おんみずか}か？

【^{おんみずか}神】^{おんみずか}と^{おんみずか}言^{おんみずか}う^{おんみずか}ご^{おんみずか}存^{おんみずか}在^{おんみずか}は、^{おんみずか}決^{おんみずか}して^{おんみずか}人^{おんみずか}間^{おんみずか}に^{おんみずか}諂^{おんみずか}う^{おんみずか}よ^{おんみずか}う^{おんみずか}な^{おんみずか}事^{おんみずか}は^{おんみずか}な^{おんみずか}さ^{おんみずか}ら^{おんみずか}な^{おんみずか}い、^{おんみずか}と^{おんみずか}勝^{おんみずか}手^{おんみずか}に^{おんみずか}信^{おんみずか}じ^{おんみずか}込^{おんみずか}ん^{おんみずか}で^{おんみずか}い^{おんみずか}る^{おんみずか}人^{おんみずか}間^{おんみずか}は、^{おんみずか}此^{おんみずか}の^{おんみずか}主^{おんみずか}イエ^{おんみずか}ス^{おんみずか}様^{おんみずか}の^{おんみずか}出^{おんみずか}現^{おんみずか}に^{おんみずか}依^{おんみずか}っ^{おんみずか}て、^{おんみずか}完^{おんみずか}全^{おんみずか}に^{おんみずか}そ^{おんみずか}の^{おんみずか}思^{おんみずか}念^{おんみずか}は^{おんみずか}覆^{おんみずか}さ^{おんみずか}れ^{おんみずか}ま^{おんみずか}し^{おんみずか}た。

◎【神は愛】(ヨハネ第一書第4章8,16節等)であります。

諂^{へつら}いや阿^{おもね}るのでは無く、真の神は【愛】を以て我^ひら被造物に過ぎない人間を大きく包み込んで下さっておられます。

イザヤ書第41章10節の最後の聖言^{みことば}はこうです。

※『われ汝を強くせん、誠^{まこと}に汝を助けん。
誠^{まこと}にわがただしき右手^{みぎのて}汝^{きさ}を支えん』

※『地球上の目立たない場所にひっそりと生活していた貴方を、私の子とする為に選び出し、終世面倒を見る事を決めました。恐れる必要は無ありません、貴方の側^{そば}には何時も私が付いています。私を誰だと思っているのですか？

天上天下に唯一の神とは、私の事です。私が貴方を強く立派な者に仕上げます。真心^{まごころ}を以て貴方を助けます。片手間にでは無く、利き腕の右手を以て本気で貴方の全生涯^{しやうがい}を支えて上げましょう。』

イザヤ書第41章9節,10節の聖言^{みことば}を、三つ児^{みっご}(三歳の幼児)にでも解るように上記に書き記して見ました。

私たちは、自分の信仰を自らの努力や忍耐の結果のように考えがちであります、どうしてどうして、此等^{これら}の聖言^{みことば}の如くに一節一節を理解して参りますと、人間の御救^みいは、神様の一人舞台ではありませんか！

真^{まこと}の唯一の神・主イエス様とは、縁^{えん}も所縁^{ゆかり}も無かった異邦人の私たちではありますが、実は神の御旨^{みむね}の中では、

◎『讚むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、
彼はキリストに由りて靈のもろもろの祝福をもて
天の処にて我らを祝し、御前^{みまえ}にて潔く瑕^{きよ}なからん為に、
世^{はじめ}の創^{さき}の前より我等をキリストの中に選び、御心^{みこころ}のままに
イエス・キリストに由り愛をもて己が子となさん事を定め給えり』
(エペソ書第1章3~5節)

『世^{はじめ}の創^{さき}の前より』とありますから、ずっとずっと昔から神は私たちを選び、神の子となされるご計画を持っておられたのであります。

『愛をもて己が子となさん事を定め』ておられた、との決定事項の聖言^{みことば}の先に、『御前^{みまえ}にて潔く瑕^{きよ}なからん為に』とか『御心^{みこころ}のままに』と言ったお言葉が目^めに焼き付いて参ります。

神が私たち選びの中に在^ある者を、どのように育てようとしておられるのか、既に頂戴^{すで}している『靈のもろもろの祝福』の中に在^あって、あれこれ思わされております。

聖書を教典の一部としている世界一信徒数の多い宗教団体では、此の世で中途半端な信仰しか持てなかつた者は、死後、煉獄^{れんごく}なる処に行き、そこで罪の浄^{きよ}めを終えてから天国に行く^{きよ}と教えているとか。

そのような教理を、私は聖書の何処から見出す事が出来ません。

此の世の中だけで、全き御救いに与り、様々の試煉に勝利して、死後は神の御許に直行し、下記のような神様からの歓待の御言を賜りたいもので御座います。

◎『宜いかな、善かつ忠なる僕、なんじは僅かなる物に忠なりき。

我なんじに多くの物を掌どらせん、汝の主人の歓喜に入れ。』

(マタイ傳第25章21節等)

様々な試煉に勝利して、と記しましたが、聖霊(御霊)を冒瀆する罪は兎も角として、神からの試煉に失敗して信仰の挫折を覚える事もあります。神は、自らが選んだ者を必ず勝利者に仕立て上げる事を定めておられる聖言が、ロマ書第14章に見受けられます。

◎『食う者は食わぬ者を蔑すべからず、食わぬ者は食う者を

審くべからず、神は彼を容れ給えばなり。

なんじ如何なる者なれば、他人の僕を審くか、

彼が立つも倒るも其の主人に由れり。

彼は必ず立てられん、主は能く之を立たせ給うべし。』

(ロマ書第14章3,4節)

クリスチャン信仰者の信仰の在り方は、皆、それぞれであります。

自らの信仰の在り方を誇り、他の兄弟・姉妹方の信仰を詰ったり軽蔑する事は、その御主人様であられる神のお立場から見たら、神の選んだ者を勝手に裁く行為は、お前は何様なのだ、とご立腹の対象であります。

聖言には、自らが選んだ者に対する強い自負の念が偲ばれます。

神が選ばれた者は、神が必ず面倒を見て、立派な神の子供として仕立て上げると仰有ってお出でであります。

選ばれている私達からしましたら、誠に有り難い御言であります。

神に選ばれた我らは、神に対しては当然であります。また兄弟・姉妹方の中に在っても謙虚をモットーと致さねばなりません。

◎『神は高ぶる者を拒ぎ、へりくだる者に恩恵を与え給う』

(ヤコブ書第4章6節及びペテロ前書第5章5節)

我らに今、神から与えられている誠命は、【愛】であります。

使徒パウロ先生は、コリント前書第13章3節に、

◎『たとえ我わが財産をことごとく施し、

又わが身を焼かるる為に付すとも、愛なくば我に益なし。』

彼は又、続けて朗朗と【愛】を謳い上げます。

◎『愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、高ぶらず、

非禮を行わず、己の利を求めず、憤おらず、人の悪を思わず、

不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、凡そ事忍び、

おおよそ事信じ、おおよそ事耐うるなり。』

(コリント前書第13章4節～7節)

我らは、キリストと言う新しき人を着せられており（コロサイ3:10）、その^{クリスチャン}基督者としての徳を全うするには【愛】という^{おび}帯（コロサイ3:14）でキリリと締め上げねばなりません。

どんなに立派な着物を着ても、^{おび}帯がしっかりと^{むす}結ばれていなければ、着物の前は開けてみっともない姿となります。

◎『常に喜べ、^た絶えず^{すべ}祈れ、凡てのこと感謝せよ、

これキリスト・イエスに由りて神の汝らに求め給う所なり。

^{みたま}御霊を消すな、^{なみ}預言を蔑すな、^{すべ}凡てのこと^{こころ}試みて

善きものを守り、^{すべ}凡て^{たぐい}悪の類に遠ざかれ。』

（テサロニケ前書第5章16節から22節）

我等の神・主イエス様は^{ごじあい}御慈愛の神で在られ、何処までも^{おろ}愚かな我等の信仰が少しづつでも神の^{みむね}御旨に添って前進する事を願っておられます。

“常に喜べ” “絶えず祈れ” “^{すべ}凡てのこと感謝せよ” 此の三つのワードは、^{まこと}真の神を信仰する者に対して、真の神が求めておられる^{クリスチャン}信仰者としての大切な^{たしな}嗜み（^{こころが}心懸け）であります。

神が我らに望みを掛けておられる【愛】の行為は、^{おこない}機を得るも^{おり}機を得ざるも^え寛容と^{かんよう}教誨とを^{つく}盡して、福音を^{のべつた}宣傳える事であり、^{いの}禱りの中に主イエス様に^{ちえ}智慧と^{ちから}能力を戴いて、働かせて頂きましょう。 ハレルヤ！

（2018・10・5 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責）